



沈氏七部集

續集

四

5
5625
4



門へ 5
5625
巻 4



續猿蓑集卷之上

ハレツラカシテ海濱ヲ拓クニ

東ノ一ノ子此富あらし

海ノ一ノ子此富あらし

河をやましく磯のほとり

さのふしやあらし月の色

物脊あらして肌をうた

芭蕉

沽圃

馬見

里圃

祐

蕉

昭和十六年一月十一日寄
尼野貴英氏贈



淡柿とて〜を尾に記されり
 孫、跡とら 祖文、借涉
 服指に記てあり、藤刀
 蝶を志あり、と、藤の所
 新米の寸き、一、さげ、賣に、まて
 十里、たう、に、此、余、所、に、あり、と
 母の、と、お、に、山、海、埋、て、あり、と、
 あり、と、あり、と、あり、と、あり、と、の、書、り、り
 蕉 佐 里 寛 佐 蕉 寛 里

山、久、く、後、を、海、沿、て、ま、標、榜、と
 あり、と、あり、と、あり、と、あり、と、の、さ、り、れ
 あり、と、あり、と、あり、と、あり、と、あり、と、の、ま、て、あり、と
 あり、と、あり、と、あり、と、あり、と、あり、と、の、ま、て、あり、と
 ま、り、市、に、あり、と、あり、と、あり、と、あり、と、あり、と、の、ま、て、あり、と
 伊、勢、の、下、面、に、あり、と、あり、と、あり、と、あり、と、あり、と、の、ま、て、あり、と
 あり、と、あり、と、あり、と、あり、と、あり、と、の、ま、て、あり、と
 蕉 佐 里 寛 佐 蕉 寛 里

禅寺に一日あきふ砂の上
 柳の角乃もてぬる宛
 後わいの半に傳ふもや
 ぢれ奴娘もさう守り流
 月待よ傳ふさのしらさひ
 蘿の菊もぬるさほし
 せれて来てあもほものきり
 伴傳もしらさひ乃りた
 蕉 沓 里 覓 浜 蕉 覓 里

都をりもりぬのあめ風
 おゆいりほのさめさ
 引立てしほのさめさ
 そゆと火入よおゆり蕉
 花もさゆ娘もぬるさ
 流りらのちりかの
 里 覓 浜 蕉 覓 里

雀カサの字也拵りて梅もものある
 たりさかの岸の梅一ちり月
 鳥かたを西ちしてさるれを秋葉て
 物くしつらさるるのさく月満
 花もがさつらさるるのさく月満
 花もがさつらさるるのさく月満

馬寛
 佐圃
 里圃
 寛
 佐
 里

馬寛

日

悔とまゝらぬの「まのたそなひ
 浅はまんとてまゝらぬら
 のよみいほまゝのちかき
 むめりまゝら 国方乃客
 何とまゝとてまゝらぬ
 風よこめちあらお船の輪の月
 意新 秋のほろあま信久て
 二層のまゝとてまゝらぬ

佐 寛 里 沼 寛 里 沼 寛

能らる伊勢丸幸洲のまゝらぬ
 世をまゝとてまゝらぬ 一法
 信来とまゝらぬ 二重まゝらぬ
 まゝ静かならぬ 一尺 係纏
 雪のほろあまのちかき
 まゝぬ合点てかゝて
 まゝしたるまゝらぬ 中まゝ
 と静 意新のまゝらぬ

佐 寛 里 沼 寛 里 沼 寛

伊勢丸

汁のきよよいなる身如子のちもて
あゝもまをさる川かてと家
口しり寺の指圖をさる
屋のおきらあをま
隣りてあゝあゝあゝ
早下りてなよよの
肌入て秋にたゝり
影よとちとくら世の
里 佐 寛 里 佐 寛 里 佐

けら魚を寶の母にあとの向て
の舟てりあ物らなる
車のみねに帷子対の
すて氣味よと杉苗の風
花のうけをまひ立雛の
あゝ田の土のがくけ
里 佐 寛 里 佐 寛 里 佐

りすゆる 山原う南
 多のよさたのちたうくを地
 大根のきく飯土の梅くれて
 上下のよにちるよあのみあ
 所切の月見方頃の集あ殊
 着うらうくくとらあうくは

里圃

沓圃

芭蕉

馬寛

沓

里

如思彼の誓り此等極りて
 清く此等を扱わぬく
 想の極みよきうけなり
 月利ては事よれまらかり
 状等を駿河の飛御籠りて
 やういせりめをうぬりの氣
 筆の筆よもあつたの地ちまう
 伊弉氣つゝの綿とりのも
 依 葛 里 流 葛 里 依 葛

うき旅を懸といれ立流りも
 たるぬきぬぬぬぬぬぬぬ
 某舟の流の中より流りて
 極の傍へ行なむさしてなり
 百城のなりてあらもせも
 一つをんを膳よのあつた東
 責おの流極はしおちり
 りあのおりしをそのおひまか
 芝 里 流 葛 里 依 葛 里

海山

砂をよめる藤の中は絡線の
 糸をよめるしちをよめる 位
 火爐の火にかけて携手は
 一ふゆ〜 唯る米
 折しは寒月の起るまは
 御に加减りちのあをさ
 月よよ〜しちをよめる
 およひのあをさよよる

里 佐 苺 里 佐 苺 里 佐

手拂の娘をよめて娘のささこ
 こよよのささこらしてはささ
 したのあをさよよる
 寺のひけららら原のまは
 冬ふりをよめるしちの甲
 一ふゆ〜あをさよよる風

里 佐 苺 里 佐 苺 里 佐

續き

猿蓑にもれとちおの松露汁
けをささりれと静かなる
水かき池のゆりるありて
い藤竹ましはまをい
鶏ふあうらやとさるの月
つらとれかきとれんをさる秋

佐圃

芭蕉

支考

惟然

蕉

考

猿蓑上

+

ふと志すし一為てあはれなる鶴の鳥
 不空の標の癖をたしむる（まきり）
 舞々舞てあはれとせむ（あはれ）
 中国のりの杖のたなを
 細目の月をさくやう振舞
 一きお織り失てさくあはれ
 いたしなまきりあはれの比の根根
 心にくあはれあはれの月
 蕉 然 考 蕉 然 考 蕉 然

ぬあり一畑の人のうけあはれと
 ぬあはれなるあはれ小鶴
 見てあはれあはれあはれの笑あはれ
 あはれあはれあはれあはれあはれ
 さら風の又あはれあはれあはれ
 わらあはれあはれあはれあはれ
 ぬあはれのあはれあはれあはれ
 望むあはれあはれあはれあはれ
 蕉 然 考 蕉 然 考 蕉 然 考 蕉 然

大せりなるはく二なるはく書のの種 蕉
 雪くさる——中のころを 考
 まらむ社の字掛る皆あふれ 然
 奥のせきをそとへの作 蕉
 酒よりと肴のやらふ月にて 考
 赤鷄はきこふこり 然
 うらぬ髪のとらぬはくを 蕉
 平流のとはらるとおふの 考

もも花をいしむるはくは風の風 然
 大こつうひの園よゆう申ら 蕉
 来擗もらあふよ——してゆきや 考
 〜〜〜めて糸の中を押あふ 蕉
 けあふり油をそらたのけも 然
 鴨の油のまこあけあふまふ 考

ろろろ色人の歌よろひておちへ次鶴
 等て有ゆかめおちをやすして憂鬱
 比を阿婆もたまたまのまことらへ
 されしそ支をいぢのさよははら
 ぶて阿部の比をさくかたもおめだう
 ぎを湖のあまのやうをさくかた
 わられて川にけあさひおちへうさ
 のと背を夏のいづくかたにさくか
 ら後々芳の息の宴何そあうさくか

ろろろの解て解ゆるものあうを阿婆の歌
 のまをのまさんとたまたまあひぬ

芭蕉

ろのむやあてあし一お
 岸をさくかたもさくかたの提先
 等てあまの糸のさくかた入て
 ちき草葉よみ故柳一也
 月影のちあちあうさくかた
 ちかあて清まらるる驚かた
 芭蕉
 曲あま
 川高
 惟然
 支考
 芭蕉

徳を枿場の卯へ追みか
 山々ふれ多きちてあは
 寂桂ちろ面福ふもさあ
 寫て工又をさうらろ 照澤
 おれつ度身お徳多く枿の事
 持仰のうぢよ又日さ
 平田ふ葉を蔚き けと疎
 秋風さうらこ一の居風品
 然 考 翠 蕉 考 然

馬りて旅ひぬら月の親
 危死つきしもの多うら
 癖好のこも 此花おあは
 五月さうの襟もよこさ
 暮風よ昔徳のはゆら
 暮く村くぬけさうら
 喰くぬ聲も響も口ま
 何その町をら依よぢら
 蕉 然 考 蕉 考 然

昔はさき持の甘さなるをいふ
蔵こいつらも仲月明く末蕉
お前も臨見よと川矢木の町
陰の日はよ雪乃氣を然
吾らもらも酒のりには
さかえの糸を糸あらし
封付—又茶事とら月の香
そら—あらしも空の上を
蕉
芳

虫籠へら世帯の産の何系所
えん籠をあらう表一固、
々のつらよ鏡をえらう次格の上
大やな鏡のこんみせゆる
蓋ちるる能の能抑おきて
踊うけつ—こま桐の下
高

續猿蓑集卷之下

春之部 花梅

平流

温ふのあつさあぢやと梅

寝時のとくさむかひの梅

朝のぬちの向もあつさ梅

ちと道やあの般らと梅

角のぬちの梅

其角

芭蕉

洞木

女守

[Faint bleed-through text from the reverse side of the page]

花散てゆくらん軒のやすむら花

酒堂

多貴なる酒名よあまのりて又君
の血もも酔ひのやまのりて又君
の血もも酔ひのやまのりて又君

酒歌なる琴の音もまた空の花

惟然

賭みしてほちもぬりけりて

支考

人のまもわく霞のしる川橋

治徳

ららるや思の中一のたの水面

猿雖

七川よりたるともあはれ申の

陽和

らら新おもひもあはれ申橋

乙洲

咲花をさしつゝきりる老木の

木叢

家もやあはれもあはれ申橋

法荷

一の船やいづれあはれ申橋

子珊

葉金のあはれもあはれ申橋

卓哉

田家

花碧のあはれもあはれ申橋

木子星

咲あはれもあはれ申橋

桃首

ふりよるるいし 木の葉より 一桐

あふれ木の根やあふるる花の露 如雪

花をよみよき 似合世に光花 其角

いれぬくにまらぬあふるる花の葉 一羽うし

あふるる花の葉から軒の花 卓袋

一月を花よのあふるる花の葉 沾圃

八重を花よのあふるる花の葉 全

若菜

濡縁や花の葉あふるる土の葉 光雲

あふるる花の葉あふるる花の葉 曲の葉

夕波の船よあふるる花の葉 孤屋

一かぬの牡丹をあふるる花の葉 尾頭

梅 附柳

あふるる花の葉あふるる花の葉 芭蕉

あふるる花の葉あふるる花の葉 野水

守梅のあまひ業りり野老賣 其角
 里坊も確まゝやせ丸の石 昌房
 投入や梅のわしきせほのひき 良品
 一病僧のなまらぬ梅のさかすか 曾江
 あゝしり記の巻末すこやし梅花 万幸
 為らぬや梅の陰さす下弦の縁 魚目
 まゝし梅やきりしなまやせむかふあゝり 平川
 霞所や梅のよちひきききききき 天丹

天竺のやー海み法て
 男あはまきとねまや梅の籠まゝん 遊泉
 うれしし此戀のまゝやせあ柳 千羽
 付くさあまふららり川やな美 意之
 ちう道を教しちうしや古柳 李由
 著物のまゝしれしはま馬の曲 九之丸
 痛まうけてるあま海らねうね 巴天

鳥 附魚

梅

きよよせりのうは^{ナケシ}義塵々⁴車 其角

うしひらや²思³を⁴塀⁵越⁶の⁷風⁸は⁹あり 史邦

そらに¹手²も³と⁴は⁵ち⁶ら⁷か⁸う⁹の¹⁰た¹¹と¹² 智月

そら¹の²あ³の⁴こ⁵ら⁶あ⁷れ⁸ま⁹く 芭蕉

際¹を²も³あ⁴ら⁵じ⁶や⁷雉⁸の⁹あ¹⁰ら¹¹く¹²の¹³ 去来

ま¹る²や³葦⁴は⁵は⁶る⁷ん⁸雉⁹の¹⁰あ¹¹ら¹²く¹³の¹⁴ 西堂

あ¹ら²く³の⁴月⁵の⁶あ⁷ら⁸く⁹の¹⁰あ¹¹ら¹²く¹³の¹⁴ 傘下

あ¹ら²く³の⁴あ⁵ら⁶く⁷の⁸あ⁹ら¹⁰く¹¹の¹²あ¹³ら¹⁴く¹⁵の¹⁶ 長印

燕¹や²田³を⁴た⁵ら⁶う⁷あ⁸つ⁹た¹⁰鳥¹¹の¹²あ¹³ら¹⁴く¹⁵ 野産

葉¹の²中³や⁴あ⁵を⁶あ⁷ら⁸く⁹て¹⁰あ¹¹ら¹²く¹³の¹⁴あ¹⁵ら¹⁶く¹⁷ 少年 峯嵐

雀¹子²や³姉⁴の⁵あ⁶ら⁷く⁸の⁹あ¹⁰ら¹¹く¹²の¹³あ¹⁴ら¹⁵く¹⁶の¹⁷あ¹⁸ら¹⁹く²⁰ 槐市

蟻¹ら²に³あ⁴ら⁵く⁶雀⁷ら⁸子⁹飼¹⁰ひ¹¹の¹²あ¹³ら¹⁴く¹⁵の¹⁶あ¹⁷ら¹⁸く¹⁹の²⁰あ²¹ら²²く²³の²⁴あ²⁵ら²⁶く²⁷ 何瓢

あ¹ら²く³の⁴あ⁵ら⁶く⁷の⁸あ⁹ら¹⁰く¹¹の¹²あ¹³ら¹⁴く¹⁵の¹⁶あ¹⁷ら¹⁸く¹⁹の²⁰あ²¹ら²²く²³の²⁴あ²⁵ら²⁶く²⁷の²⁸あ²⁹ら³⁰く³¹の³²あ³³ら³⁴く³⁵の³⁶あ³⁷ら³⁸く³⁹の⁴⁰あ⁴¹ら⁴²く⁴³の⁴⁴あ⁴⁵ら⁴⁶く⁴⁷の⁴⁸あ⁴⁹ら⁵⁰く⁵¹の⁵²あ⁵³ら⁵⁴く⁵⁵の⁵⁶あ⁵⁷ら⁵⁸く⁵⁹の⁶⁰あ⁶¹ら⁶²く⁶³の⁶⁴あ⁶⁵ら⁶⁶く⁶⁷の⁶⁸あ⁶⁹ら⁷⁰く⁷¹の⁷²あ⁷³ら⁷⁴く⁷⁵の⁷⁶あ⁷⁷ら⁷⁸く⁷⁹の⁸⁰あ⁸¹ら⁸²く⁸³の⁸⁴あ⁸⁵ら⁸⁶く⁸⁷の⁸⁸あ⁸⁹ら⁹⁰く⁹¹の⁹²あ⁹³ら⁹⁴く⁹⁵の⁹⁶あ⁹⁷ら⁹⁸く⁹⁹の¹⁰⁰あ¹⁰¹ら¹⁰²く¹⁰³の¹⁰⁴あ¹⁰⁵ら¹⁰⁶く¹⁰⁷の¹⁰⁸あ¹⁰⁹ら¹¹⁰く¹¹¹の¹¹²あ¹¹³ら¹¹⁴く¹¹⁵の¹¹⁶あ¹¹⁷ら¹¹⁸く¹¹⁹の¹²⁰あ¹²¹ら¹²²く¹²³の¹²⁴あ¹²⁵ら¹²⁶く¹²⁷の¹²⁸あ¹²⁹ら¹³⁰く¹³¹の¹³²あ¹³³ら¹³⁴く¹³⁵の¹³⁶あ¹³⁷ら¹³⁸く¹³⁹の¹⁴⁰あ¹⁴¹ら¹⁴²く¹⁴³の¹⁴⁴あ¹⁴⁵ら¹⁴⁶く¹⁴⁷の¹⁴⁸あ¹⁴⁹ら¹⁵⁰く¹⁵¹の¹⁵²あ¹⁵³ら¹⁵⁴く¹⁵⁵の¹⁵⁶あ¹⁵⁷ら¹⁵⁸く¹⁵⁹の¹⁶⁰あ¹⁶¹ら¹⁶²く¹⁶³の¹⁶⁴あ¹⁶⁵ら¹⁶⁶く¹⁶⁷の¹⁶⁸あ¹⁶⁹ら¹⁷⁰く¹⁷¹の¹⁷²あ¹⁷³ら¹⁷⁴く¹⁷⁵の¹⁷⁶あ¹⁷⁷ら¹⁷⁸く¹⁷⁹の¹⁸⁰あ¹⁸¹ら¹⁸²く¹⁸³の¹⁸⁴あ¹⁸⁵ら¹⁸⁶く¹⁸⁷の¹⁸⁸あ¹⁸⁹ら¹⁹⁰く¹⁹¹の¹⁹²あ¹⁹³ら¹⁹⁴く¹⁹⁵の¹⁹⁶あ¹⁹⁷ら¹⁹⁸く¹⁹⁹の²⁰⁰あ²⁰¹ら²⁰²く²⁰³の²⁰⁴あ²⁰⁵ら²⁰⁶く²⁰⁷の²⁰⁸あ²⁰⁹ら²¹⁰く²¹¹の²¹²あ²¹³ら²¹⁴く²¹⁵の²¹⁶あ²¹⁷ら²¹⁸く²¹⁹の²²⁰あ²²¹ら²²²く²²³の²²⁴あ²²⁵ら²²⁶く²²⁷の²²⁸あ²²⁹ら²³⁰く²³¹の²³²あ²³³ら²³⁴く²³⁵の²³⁶あ²³⁷ら²³⁸く²³⁹の²⁴⁰あ²⁴¹ら²⁴²く²⁴³の²⁴⁴あ²⁴⁵ら²⁴⁶く²⁴⁷の²⁴⁸あ²⁴⁹ら²⁵⁰く²⁵¹の²⁵²あ²⁵³ら²⁵⁴く²⁵⁵の²⁵⁶あ²⁵⁷ら²⁵⁸く²⁵⁹の²⁶⁰あ²⁶¹ら²⁶²く²⁶³の²⁶⁴あ²⁶⁵ら²⁶⁶く²⁶⁷の²⁶⁸あ²⁶⁹ら²⁷⁰く²⁷¹の²⁷²あ²⁷³ら²⁷⁴く²⁷⁵の²⁷⁶あ²⁷⁷ら²⁷⁸く²⁷⁹の²⁸⁰あ²⁸¹ら²⁸²く²⁸³の²⁸⁴あ²⁸⁵ら²⁸⁶く²⁸⁷の²⁸⁸あ²⁸⁹ら²⁹⁰く²⁹¹の²⁹²あ²⁹³ら²⁹⁴く²⁹⁵の²⁹⁶あ²⁹⁷ら²⁹⁸く²⁹⁹の³⁰⁰あ³⁰¹ら³⁰²く³⁰³の³⁰⁴あ³⁰⁵ら³⁰⁶く³⁰⁷の³⁰⁸あ³⁰⁹ら³¹⁰く³¹¹の³¹²あ³¹³ら³¹⁴く³¹⁵の³¹⁶あ³¹⁷ら³¹⁸く³¹⁹の³²⁰あ³²¹ら³²²く³²³の³²⁴あ³²⁵ら³²⁶く³²⁷の³²⁸あ³²⁹ら³³⁰く³³¹の³³²あ³³³ら³³⁴く³³⁵の³³⁶あ³³⁷ら³³⁸く³³⁹の³⁴⁰あ³⁴¹ら³⁴²く³⁴³の³⁴⁴あ³⁴⁵ら³⁴⁶く³⁴⁷の³⁴⁸あ³⁴⁹ら³⁵⁰く³⁵¹の³⁵²あ³⁵³ら³⁵⁴く³⁵⁵の³⁵⁶あ³⁵⁷ら³⁵⁸く³⁵⁹の³⁶⁰あ³⁶¹ら³⁶²く³⁶³の³⁶⁴あ³⁶⁵ら³⁶⁶く³⁶⁷の³⁶⁸あ³⁶⁹ら³⁷⁰く³⁷¹の³⁷²あ³⁷³ら³⁷⁴く³⁷⁵の³⁷⁶あ³⁷⁷ら³⁷⁸く³⁷⁹の³⁸⁰あ³⁸¹ら³⁸²く³⁸³の³⁸⁴あ³⁸⁵ら³⁸⁶く³⁸⁷の³⁸⁸あ³⁸⁹ら³⁹⁰く³⁹¹の³⁹²あ³⁹³ら³⁹⁴く³⁹⁵の³⁹⁶あ³⁹⁷ら³⁹⁸く³⁹⁹の⁴⁰⁰あ⁴⁰¹ら⁴⁰²く⁴⁰³の⁴⁰⁴あ⁴⁰⁵ら⁴⁰⁶く⁴⁰⁷の⁴⁰⁸あ⁴⁰⁹ら⁴¹⁰く⁴¹¹の⁴¹²あ⁴¹³ら⁴¹⁴く⁴¹⁵の⁴¹⁶あ⁴¹⁷ら⁴¹⁸く⁴¹⁹の⁴²⁰あ⁴²¹ら⁴²²く⁴²³の⁴²⁴あ⁴²⁵ら⁴²⁶く⁴²⁷の⁴²⁸あ⁴²⁹ら⁴³⁰く⁴³¹の⁴³²あ⁴³³ら⁴³⁴く⁴³⁵の⁴³⁶あ⁴³⁷ら⁴³⁸く⁴³⁹の⁴⁴⁰あ⁴⁴¹ら⁴⁴²く⁴⁴³の⁴⁴⁴あ⁴⁴⁵ら⁴⁴⁶く⁴⁴⁷の⁴⁴⁸あ⁴⁴⁹ら⁴⁵⁰く⁴⁵¹の⁴⁵²あ⁴⁵³ら⁴⁵⁴く⁴⁵⁵の⁴⁵⁶あ⁴⁵⁷ら⁴⁵⁸く⁴⁵⁹の⁴⁶⁰あ⁴⁶¹ら⁴⁶²く⁴⁶³の⁴⁶⁴あ⁴⁶⁵ら⁴⁶⁶く⁴⁶⁷の⁴⁶⁸あ⁴⁶⁹ら⁴⁷⁰く⁴⁷¹の⁴⁷²あ⁴⁷³ら⁴⁷⁴く⁴⁷⁵の⁴⁷⁶あ⁴⁷⁷ら⁴⁷⁸く⁴⁷⁹の⁴⁸⁰あ⁴⁸¹ら⁴⁸²く⁴⁸³の⁴⁸⁴あ⁴⁸⁵ら⁴⁸⁶く⁴⁸⁷の⁴⁸⁸あ⁴⁸⁹ら⁴⁹⁰く⁴⁹¹の⁴⁹²あ⁴⁹³ら⁴⁹⁴く⁴⁹⁵の⁴⁹⁶あ⁴⁹⁷ら⁴⁹⁸く⁴⁹⁹の⁵⁰⁰あ⁵⁰¹ら⁵⁰²く⁵⁰³の⁵⁰⁴あ⁵⁰⁵ら⁵⁰⁶く⁵⁰⁷の⁵⁰⁸あ⁵⁰⁹ら⁵¹⁰く⁵¹¹の⁵¹²あ⁵¹³ら⁵¹⁴く⁵¹⁵の⁵¹⁶あ⁵¹⁷ら⁵¹⁸く⁵¹⁹の⁵²⁰あ⁵²¹ら⁵²²く⁵²³の⁵²⁴あ⁵²⁵ら⁵²⁶く⁵²⁷の⁵²⁸あ⁵²⁹ら⁵³⁰く⁵³¹の⁵³²あ⁵³³ら⁵³⁴く⁵³⁵の⁵³⁶あ⁵³⁷ら⁵³⁸く⁵³⁹の⁵⁴⁰あ⁵⁴¹ら⁵⁴²く⁵⁴³の⁵⁴⁴あ⁵⁴⁵ら⁵⁴⁶く⁵⁴⁷の⁵⁴⁸あ⁵⁴⁹ら⁵⁵⁰く⁵⁵¹の⁵⁵²あ⁵⁵³ら⁵⁵⁴く⁵⁵⁵の⁵⁵⁶あ⁵⁵⁷ら⁵⁵⁸く⁵⁵⁹の⁵⁶⁰あ⁵⁶¹ら⁵⁶²く⁵⁶³の⁵⁶⁴あ⁵⁶⁵ら⁵⁶⁶く⁵⁶⁷の⁵⁶⁸あ⁵⁶⁹ら⁵⁷⁰く⁵⁷¹の⁵⁷²あ⁵⁷³ら⁵⁷⁴く⁵⁷⁵の⁵⁷⁶あ⁵⁷⁷ら⁵⁷⁸く⁵⁷⁹の⁵⁸⁰あ⁵⁸¹ら⁵⁸²く⁵⁸³の⁵⁸⁴あ⁵⁸⁵ら⁵⁸⁶く⁵⁸⁷の⁵⁸⁸あ⁵⁸⁹ら⁵⁹⁰く⁵⁹¹の⁵⁹²あ⁵⁹³ら⁵⁹⁴く⁵⁹⁵の⁵⁹⁶あ⁵⁹⁷ら⁵⁹⁸く⁵⁹⁹の⁶⁰⁰あ⁶⁰¹ら⁶⁰²く⁶⁰³の⁶⁰⁴あ⁶⁰⁵ら⁶⁰⁶く⁶⁰⁷の⁶⁰⁸あ⁶⁰⁹ら⁶¹⁰く⁶¹¹の⁶¹²あ⁶¹³ら⁶¹⁴く⁶¹⁵の⁶¹⁶あ⁶¹⁷ら⁶¹⁸く⁶¹⁹の⁶²⁰あ⁶²¹ら⁶²²く⁶²³の⁶²⁴あ⁶²⁵ら⁶²⁶く⁶²⁷の⁶²⁸あ⁶²⁹ら⁶³⁰く⁶³¹の⁶³²あ⁶³³ら⁶³⁴く⁶³⁵の⁶³⁶あ⁶³⁷ら⁶³⁸く⁶³⁹の⁶⁴⁰あ⁶⁴¹ら⁶⁴²く⁶⁴³の⁶⁴⁴あ⁶⁴⁵ら⁶⁴⁶く⁶⁴⁷の⁶⁴⁸あ⁶⁴⁹ら⁶⁵⁰く⁶⁵¹の⁶⁵²あ⁶⁵³ら⁶⁵⁴く⁶⁵⁵の⁶⁵⁶あ⁶⁵⁷ら⁶⁵⁸く⁶⁵⁹の⁶⁶⁰あ⁶⁶¹ら⁶⁶²く⁶⁶³の⁶⁶⁴あ⁶⁶⁵ら⁶⁶⁶く⁶⁶⁷の⁶⁶⁸あ⁶⁶⁹ら⁶⁷⁰く⁶⁷¹の⁶⁷²あ⁶⁷³ら⁶⁷⁴く⁶⁷⁵の⁶⁷⁶あ⁶⁷⁷ら⁶⁷⁸く⁶⁷⁹の⁶⁸⁰あ⁶⁸¹ら⁶⁸²く⁶⁸³の⁶⁸⁴あ⁶⁸⁵ら⁶⁸⁶く⁶⁸⁷の⁶⁸⁸あ⁶⁸⁹ら⁶⁹⁰く⁶⁹¹の⁶⁹²あ⁶⁹³ら⁶⁹⁴く⁶⁹⁵の⁶⁹⁶あ⁶⁹⁷ら⁶⁹⁸く⁶⁹⁹の⁷⁰⁰あ⁷⁰¹ら⁷⁰²く⁷⁰³の⁷⁰⁴あ⁷⁰⁵ら⁷⁰⁶く⁷⁰⁷の⁷⁰⁸あ⁷⁰⁹ら⁷¹⁰く⁷¹¹の⁷¹²あ⁷¹³ら⁷¹⁴く⁷¹⁵の⁷¹⁶あ⁷¹⁷ら⁷¹⁸く⁷¹⁹の⁷²⁰あ⁷²¹ら⁷²²く⁷²³の⁷²⁴あ⁷²⁵ら⁷²⁶く⁷²⁷の⁷²⁸あ⁷²⁹ら⁷³⁰く⁷³¹の⁷³²あ⁷³³ら⁷³⁴く⁷³⁵の⁷³⁶あ⁷³⁷ら⁷³⁸く⁷³⁹の⁷⁴⁰あ⁷⁴¹ら⁷⁴²く⁷⁴³の⁷⁴⁴あ⁷⁴⁵ら⁷⁴⁶く⁷⁴⁷の⁷⁴⁸あ⁷⁴⁹ら⁷⁵⁰く⁷⁵¹の⁷⁵²あ⁷⁵³ら⁷⁵⁴く⁷⁵⁵の⁷⁵⁶あ⁷⁵⁷ら⁷⁵⁸く⁷⁵⁹の⁷⁶⁰あ⁷⁶¹ら⁷⁶²く⁷⁶³の⁷⁶⁴あ⁷⁶⁵ら⁷⁶⁶く⁷⁶⁷の⁷⁶⁸あ⁷⁶⁹ら⁷⁷⁰く⁷⁷¹の⁷⁷²あ⁷⁷³ら⁷⁷⁴く⁷⁷⁵の⁷⁷⁶あ⁷⁷⁷ら⁷⁷⁸く⁷⁷⁹の⁷⁸⁰あ⁷⁸¹ら⁷⁸²く⁷⁸³の⁷⁸⁴あ⁷⁸⁵ら⁷⁸⁶く⁷⁸⁷の⁷⁸⁸あ⁷⁸⁹ら⁷⁹⁰く⁷⁹¹の⁷⁹²あ⁷⁹³ら⁷⁹⁴く⁷⁹⁵の⁷⁹⁶あ⁷⁹⁷ら⁷⁹⁸く⁷⁹⁹の⁸⁰⁰あ⁸⁰¹ら⁸⁰²く⁸⁰³の⁸⁰⁴あ⁸⁰⁵ら⁸⁰⁶く⁸⁰⁷の⁸⁰⁸あ⁸⁰⁹ら⁸¹⁰く⁸¹¹の⁸¹²あ⁸¹³ら⁸¹⁴く⁸¹⁵の⁸¹⁶あ⁸¹⁷ら⁸¹⁸く⁸¹⁹の⁸²⁰あ⁸²¹ら⁸²²く⁸²³の⁸²⁴あ⁸²⁵ら⁸²⁶く⁸²⁷の⁸²⁸あ⁸²⁹ら⁸³⁰く⁸³¹の⁸³²あ⁸³³ら⁸³⁴く⁸³⁵の⁸³⁶あ⁸³⁷ら⁸³⁸く⁸³⁹の⁸⁴⁰あ⁸⁴¹ら⁸⁴²く⁸⁴³の⁸⁴⁴あ⁸⁴⁵ら⁸⁴⁶く⁸⁴⁷の⁸⁴⁸あ⁸⁴⁹ら⁸⁵⁰く⁸⁵¹の⁸⁵²あ⁸⁵³ら⁸⁵⁴く⁸⁵⁵の⁸⁵⁶あ⁸⁵⁷ら⁸⁵⁸く⁸⁵⁹の⁸⁶⁰あ⁸⁶¹ら⁸⁶²く⁸⁶³の⁸⁶⁴あ⁸⁶⁵ら⁸⁶⁶く⁸⁶⁷の⁸⁶⁸あ⁸⁶⁹ら⁸⁷⁰く⁸⁷¹の⁸⁷²あ⁸⁷³ら⁸⁷⁴く⁸⁷⁵の⁸⁷⁶あ⁸⁷⁷ら⁸⁷⁸く⁸⁷⁹の⁸⁸⁰あ⁸⁸¹ら⁸⁸²く⁸⁸³の⁸⁸⁴あ⁸⁸⁵ら⁸⁸⁶く⁸⁸⁷の⁸⁸⁸あ⁸⁸⁹ら⁸⁹⁰く⁸⁹¹の⁸⁹²あ⁸⁹³ら⁸⁹⁴く⁸⁹⁵の⁸⁹⁶あ⁸⁹⁷ら⁸⁹⁸く⁸⁹⁹の⁹⁰⁰あ⁹⁰¹ら⁹⁰²く⁹⁰³の⁹⁰⁴あ⁹⁰⁵ら⁹⁰⁶く⁹⁰⁷の⁹⁰⁸あ⁹⁰⁹ら⁹¹⁰く⁹¹¹の⁹¹²あ⁹¹³ら⁹¹⁴く⁹¹⁵の⁹¹⁶あ⁹¹⁷ら⁹¹⁸く⁹¹⁹の⁹²⁰あ⁹²¹ら⁹²²く⁹²³の⁹²⁴あ⁹²⁵ら⁹²⁶く⁹²⁷の⁹²⁸あ⁹²⁹ら⁹³⁰く⁹³¹の⁹³²あ⁹³³ら⁹³⁴く⁹³⁵の⁹³⁶あ⁹³⁷ら⁹³⁸く⁹³⁹の⁹⁴⁰あ⁹⁴¹ら⁹⁴²く⁹⁴³の⁹⁴⁴あ⁹⁴⁵ら⁹⁴⁶く⁹⁴⁷の⁹⁴⁸あ⁹⁴⁹ら⁹⁵⁰く⁹⁵¹の⁹⁵²あ⁹⁵³ら⁹⁵⁴く⁹⁵⁵の⁹⁵⁶あ⁹⁵⁷ら⁹⁵⁸く⁹⁵⁹の⁹⁶⁰あ⁹⁶¹ら⁹⁶²く⁹⁶³の⁹⁶⁴あ⁹⁶⁵ら⁹⁶⁶く⁹⁶⁷の⁹⁶⁸あ⁹⁶⁹ら⁹⁷⁰く⁹⁷¹の⁹⁷²あ⁹⁷³ら⁹⁷⁴く⁹⁷⁵の⁹⁷⁶あ⁹⁷⁷ら⁹⁷⁸く⁹⁷⁹の⁹⁸⁰あ⁹⁸¹ら⁹⁸²く⁹⁸³の⁹⁸⁴あ⁹⁸⁵ら⁹⁸⁶く⁹⁸⁷の⁹⁸⁸あ⁹⁸⁹ら⁹⁹⁰く⁹⁹¹の⁹⁹²あ⁹⁹³ら⁹⁹⁴く⁹⁹⁵の⁹⁹⁶あ⁹⁹⁷ら⁹⁹⁸く⁹⁹⁹の¹⁰⁰⁰あ¹⁰⁰¹ら¹⁰⁰²く¹⁰⁰³の¹⁰⁰⁴あ¹⁰⁰⁵ら¹⁰⁰⁶く¹⁰⁰⁷の¹⁰⁰⁸あ¹⁰⁰⁹ら¹⁰¹⁰く¹⁰¹¹の¹⁰¹²あ¹⁰¹³ら¹⁰¹⁴く¹⁰¹⁵の¹⁰¹⁶あ¹⁰¹⁷ら¹⁰¹⁸く¹⁰¹⁹の¹⁰²⁰あ¹⁰²¹ら¹⁰²²く¹⁰²³の¹⁰²⁴あ¹⁰²⁵ら¹⁰²⁶く¹⁰²⁷の¹⁰²⁸あ¹⁰²⁹ら¹⁰³⁰く¹⁰³¹の¹⁰³²あ¹⁰³³ら¹⁰³⁴く¹⁰³⁵の¹⁰³⁶あ¹⁰³⁷ら¹⁰³⁸く¹⁰³⁹の¹⁰⁴⁰あ¹⁰⁴¹ら¹⁰⁴²く¹⁰⁴³の¹⁰⁴⁴あ¹⁰⁴⁵ら¹⁰⁴⁶く¹⁰⁴⁷の¹⁰⁴⁸あ¹⁰⁴⁹ら¹⁰⁵⁰く¹⁰⁵¹の¹⁰⁵²あ¹⁰⁵³ら

月の影よ猶の孤を尾櫛居る
浦の英やとまのそとくつる花

一桐
圃落

猶也 附胡蝶

ふらふら月よなきひ啼猶の影
うよとよよめてや猶の盗吟

探死
支考

おもひよけり孔望もあけら野猶は

已百

白月志

つらつらしてと翅を動かく胡蝶の影

柿梅

衣よるゑのくさやをささ鶴の影

惟然

蝶の舞おつら様よこゝはくさ

園坊

風吹よ舞のやまよ小蝶うら

ち羽
二里川

三豆舞て花みゆりき胡蝶は

雪窓

春鹿

振おしりや鹿野の鹿の角

沢維

まら耕

お稲のちをみてあてまこく麻

木草

苗れや三途とよ此者目ね
千川乃回きあつはかろく遊ばく
下流

桃 附椿

白桃や志川くもあはれを
金柑をまこし蓋なり桃のまに
依んりやき葉の枝の上の赤のま
梅はくくし申をさあまに桃のまに
花ささるふ桃や奇蜂妓の腸躍
其角
水鷗
雪芝
介我
柳琴

江東の孝子由々祖父の懐しのはるまね
わのし経文題りち川白くし休院の
光りまの事さ

小服紗よ光をやと路むはるに
種を枯しさるふ花咲様さる
取あけてるるや様のをその完
ちる様ゆありもちるに孫てる
野坡

款冬 附脚踏藤

山吹や垣み干くさ葉一重
園枿

田家乃人よ對て

山吹もあちち糸糸舞ひまは

西堂

塙おとんははしは株や蟻のよさ

雪堂

家晴や徳美よあはれあのをた

新口

まき月

山の端まじりくく只なりまき月

魯町

まき月附春雪註

おのりい草の社よりやま方のる

新口

あま調子合はるまよまきのあめ

乃龍

まき月や産丸あちちまき月

海刀

あまかしの馬の社にの
縁上店をまき月のり

まき月や杖の山くくくひび

支考

まき月や光るくくくくくくく

挑奇

まき月やあちちあちちあちち

風美

まき月や桂のあちち乃直

風福

本日

武仙 町年

百奇

尚白

圓高

山峰

平川

はまのつばねを顔倒すといふ
つばねさよの文のちむちむ

人ともぬまらや後のうら花梅 芭蕉

明らぬのちのうら花梅のあふら花 其角

様のおのふら花梅のあふら花 崑亭

葉のふら花梅のあふら花 去来

葉のふら花梅のあふら花 土芳

風腫

あふら花梅

あふら花梅

猿鏝

子行のちす川西原やまきうらふ

葛原

脊きうらおのおまふまこや花の

野原

業乃業のまふたふじ白尾の朝の

耕雪

秘の書負のなまふまふまふ

た板

う川喜やまき後白比丘を

前川

枇杷のまふのりふ怪やぬあ

斜嶺

世の業や聲きあふれものまふ

山峰

濡しふた大あふけのぬあ

任行

えりやまふまふらやふ橋のみま

竹戸

我ちるまうらに鏡すまふら

豊原

搦薬や餅よやまふれら花志

沾圃

画ちのる花目よぬらまふら

圃角

まゝ部

部

暁の雲をほろもあゝ

其角

はもよるしきも湖水の濁

交子

まゝはほや何本も踏よあゝ

角

蜀鯨のぬおきし物

支子

鳴鹿のふもあゝあゝ

如雲

無のほちゝちゝちゝ

其子

録

十二

まゝのやぶらぎのつらきまゝ

拙作

まゝのやぶらぎのつらき

昼もやぶらぎのつらき

匠圃

夕もやぶらぎのつらき

芭蕉

夕もやぶらぎのつらき

芭蕉

夕もやぶらぎのつらき

芭蕉

夕もやぶらぎのつらき

芭蕉

夕もやぶらぎのつらき

芭蕉

客あつてはつらき蓮の籠

良品

凡

朝もやぶらぎのつらき

芭蕉

夕もやぶらぎのつらき

至勝

やぶらぎ

夕もやぶらぎのつらき

芭蕉

子鹿

素入のちる母の風柱のゆき中 知七

早乙女も強くてやんまのふ 南指

ゆとら男の柱おくれさうも 魚白

田植奇あてやら影の汎ひ也 重光

一回はくりめくりてやぬの音 少枝

里の子り無橋も子あなう 支考

雲

殺せ火の烟おそくあつらふ 許六

三月月にまの雲を照よたり 野茂

細涼

涼しや竹揺りり藪はく 半残

可花葉や唐葉にわふ夕涼 唯然

海川の唐も帯

ちまひもや風をよら 史邦

涼しや如も花まての強も 空翠

ふゆーや裏門明て夕涼 杜年

涼—さし半は尾振て川の串

万幸

漫真三句

腰かけて申に涼—と階子外

酒堂

涼—と椽より足まぬ

支考

せ碑もゆらさくあつら涼うな

雪芝

第屋よあひまて

涼風もあふ—と登りのこりれ

游刀

とそか—夏申まぬけら涼う能

全

立阿りく人よあまてす

去来

黙神よこあら涼うなるのこ

正秀

職人の惟子こ涼うたそ

上芳

涼—とわ—さし羽織の風あは

我眉

本涼やらうひのこあは月

里圃

盛三句

かこらや照りかほし庭の隅

野萩

木子盛らこ世のあはるの暑者外

万幸

漫真下

七

萬醫者の心とやらと云ふ
よきもの伝へる

きよものやまを清めて森冷の曇る

正秀

取草の池のあつこや梅はくひ

乙舟

煤とらら日盛つ——
王冠新

怒風

茨ゆの垣も志あつぬ暑う船

素後

糸のくさや暑者を月におあつた

我峯

あつよりや之海をうたふ花をちこ

平吉

積あけて思ふとやあはれぬも

集賢

靴のやうな物もおのあつたうね
まゝのれちさす川とくらの曇る

里東
沼圃

舟のこ

菊にぬくく岸のぬくも
まの作や烟のいけら庫裏の窓

可誠
曲翠

五月雨附々

きよきよきよきよきよきよきよ
あつたあつたあつたあつたあつた
あつたあつたあつたあつたあつた

不玉
芭蕉

みづもや 霞ふれぬ 磯はるゑ

沓園

夕立よき一傘まゝり 自傘

拙依

白鳥や 蓮の葉もくゞく池の

古呂蘇

夕くらや ちりしけり竹の皮

曉鳥

ゆかきん傘 卯ら 空やまゝ所

圃水

彈

白鳥や 中房りて 蝶のあし

正秀

こゝろいふて 筆て ちりり 船のあし

胡故

木林の 彈 湧くよ ぬきや ぬきぬき

乙州

鯉 啼や ぬの 撒き 意の ぬきぬき

曉鳥

うし

池の 月や 潮こりきく ち 津 鯉

葉蛤

雑言

さきも 懐して 子の 動や せ 團くま

杉風

雲の 雲ふら 葉や ちりや 寺 花 畑

荆口

え 獲も 孫くひの 申の ちり ちり

知真

五

二

Faint bleed-through text from the reverse side of the page, including words like "Cincinnati" and "Ohio".

穂之部

五月

三

五月に穂麻の葉や田の

五月の花をさして穂麻

五月に穂麻の葉や田の
五月の花をさして穂麻
五月に穂麻の葉や田の
五月の花をさして穂麻
五月に穂麻の葉や田の
五月の花をさして穂麻

うらと園位を——のあそりやさけ
 林原を二方様とありのれて平田
 渺しと思ふらるる老杜唯也
 ののちうさくしるもつちんちん
 へ——此等の棉をけきさるる
 々腐りてふとちやうりら今の
 このと所の一箇は候あそり月乃
 うらららちをちんちんちん
 やらららちとあそいあそい
 のたよははあつたに候ありて
 思ふものよ——

き前の寂寞をちんちん——後を風無の
 ものちんちん五つ海何の星を
 ちんちんちんちんちんちんちん
 ちんちんちんちんちんちんちん

支考評

名月の海より冷ら田叢う能 酒壺
 月や死よあれを餘るのうさ 如行
 とのしんねん月足り 香

ぬらぬらあつちのついでに

智月

名月やちんちんの陰ま人のち

園指

名月やふゆの死やまの客

浮雲

明もや一匹の陰もす

不玉

中切り梨の葉のほく月

配力

名月やまのく〜〜

花板

名月やまのく〜〜

圃水

た〜〜

山峰

名月や〜〜

風園

名月や〜〜

需笑

老の〜〜

童女

明月〜〜

泥芥

いさよのらぬのありてかたの
いさをあつちのまららた

ニアよて〜〜

支考

艾子府と〜〜

空牙

柿の〜〜

如真

源川の末ふかねをいふ所
ぬをきいて

川ふかこの川きゆや月のな 芭蕉

十六あきち川うに園のゆか 全

いよひの園のむもやいよのむ 猿蓑

七タ

うかゆいあゆみのあゆの何 唯然

い合まこくまてゆいれ朝うす 常夏

船船のふらさういああゆの能 東潮

まぢまいまいさうゆいあゆの能 依園

おんあや黒姫の園ゆら 乙州

あやの立秋 依園

あまぬらやなよははとあゆの 高川

あや川や申よあゆいあゆの 左次

あやのあゆいあゆの 依園

あやのあゆいあゆの 依園

あやのあゆいあゆの 依園

女さるたわひぬ馬背の夢少 深子

まきりたし羽取の杖さくぬ那 馬草

一筋さつた風よりちり 煙を 鳥雲

弓園とる比たれやなまらぬ 文浪

贈芭蕉 風

百合さるる葉を寝る余も 風多

はよ姫のちやうもは 史邦

枯のちやうもは 万幸

鶏はや尾の事の時わさあし 芭蕉

鶏頭の家をたまたぬ月影り 全曉

折しや園にたれは松の 雪多

草花さかやみは動く秋の風 梅分

心人のこゝろをたれは草う 柳秋

風よよ長くはるりの雲 杉下

おろかな

新装の女をのこすは月お 田上尼

あさひの這ふてきく成り極まる
 風ま 園折
 ろもさあはらうらまもて湯の舟
 其角
 朝衣にまろれー人や笠帽子

虫 附鳥

さくらーに傍に経る可なり
 可南^サ
 電馬や部よあつてあつち柳
 水枝
 火の傍で飼ふまふら虫のあつち
 正秀
 秋のおやまの野とまゝこし
 水鷗
 このもや形よあ合し月の影
 杜若

磯の何の味ある羊の先
 探丸
 襦袢や腹まあやうらふのと
 葛葉
 世違のまに髪さうらん解の
 示峯
 めげあつちよひて死る秋の
 大子
 鳥にゆた〜浦のまをり
 馬寛
 鶴鴨やきりまはる川原
 水固
 葉の粒まえあつち時や啼鶴
 支考
 若のふれさ〜のま〜四十雀
 芭蕉

穠風

秋うきや二書はしと秋の風
 雀子乃盤もさし秋の風
 何なりやあしと秋の風
 秋の風やあしと秋の風
 ちのしと秋の風
 ちのしと秋の風
 あれしてあしと秋の風

遊刀
 式之
 支考
 風園
 圃無
 ぬき
 徒雖

穠妻

穠うきや二書はしと穠の風
 穠うきやあしと穠の風
 何なりやあしと穠の風
 穠の風やあしと穠の風
 ちのしと穠の風
 ちのしと穠の風
 あれしてあしと穠の風

一東
 宇比
 土世
 芭蕉
 木實 附菌
 為有
 玄鹿

秋の月あつる尾掃のりろ 酒堂

ほゆしき葉をもろく掃く ちり

と川草や垣もの清見一盞 依圃

伊豆の山中よ阿婆の 兼好の心を記して

松草や形のらるる山の形 惟然

す川草やきぬぬのまのまの 芭蕉

楓

後庭の埦ふらふらう 小鯉

麻

あすちにあの麻やゆめ 風睡

森あつたよ麻あつたよ 一敵

農業

起しはしきを逐ひり 車廂

木の下に種あつた種 買山

さほしきものあつた種 知雪

あつたのち後よ ちり

芭蕉
 乃龍
 斗從
 支考
 全
 惟然
 本
 占園
 百
 帆
 一
 山雀
 早稲
 葛

大御所の御成敗
 御成敗の御成敗

菊

葛
 濁子
 支考
 野峯
 五屏
 借
 暮秋

唐の匠也背負うて海を秋の雪
此の秋を鼓のうの葉の恨り船
此の秋を鼓のうの葉の恨り船
芭蕉

雑稿

又六十海をほのめて殺いせつ
海をわくはゆめをなほし舟の舟
ある故也言れ何れも秋の雪
団古
睡止
にた

身ぬらひに霞のさちちと初め
さうおや掃くぬさぬの葉お
柿のさぬは焼くと葉をん為著
の笛鼓ありよくとて能く
ゆめを盡て舞を心の舞
ゆめを盡て舞を心の舞
ゆめを盡て舞を心の舞
ゆめを盡て舞を心の舞
ゆめを盡て舞を心の舞

車押よみり廻らうり付るる
 柴賣ちらうりさうりさうり
 梳賣ともやうりさうり
 元徳のさうりさうり
 ろらうりさうり
 ぶよさうり
 柿色さうり
 さうり

野原
 鹿川
 里圃

沖西の能目らうり付るる
 さうり
 さうり
 さうり

佐圃
 如鯢
 支考

元禄辛酉らうり
 九月廿五日園遊

午陽の雲をわらわら
 中しけらうり
 さうり

こころさぬ琴や作ぬ事あり

車馬

草

あかや珠唄の月透る

曲翠

ちやほほく嘆やまかしの水色

水固

あかのはの〜れや露の

唯然

花露 趙南のうき

山家集の野より

一葉もこころぬ事あり

芭蕉

こころなきえより雨くゆり

車馬

あか梅のちよ〜れや露の

土ま

こころなきも〜れや露の

露

山家集の野より

あか梅のちよ〜れや露の

依徳

目ま〜して江の甜き〜れや露の

露沾

あか川や木の色なき〜れや露の

唯然

松風

三十一

松風より足さうりいふさあのみ葉の

い松風字の
なまこいひまて

とくろり先かてさる葉の

枯たてくさふよさうたあまこい

牛のり返る枯葉のさうり

冬枯れまきまてさうりな地

葉一枯れさうりてまきぬ地あり

脚さ枯てのさうり地あり

松風

道

松風

柳醉

乃龍

利半

支老

木ありやさうりまきぬ地あり

風や背中吹さうり牛のりあり

木枯れ刈田の畔の秋まきあり

さかすりやさうりまきぬ地あり

夷講

さうりす葉か賣み袴さうり

さうりは葉か賣みも袴さうり

習日

風竹

惟然

鹿生

芭蕉

利合

松風

三十一

鳥 附いま

乃やの海さき

塵埃よめくお目もたし浦

追うけし雲よころか千もやの事

かありとんと庚申やられあを形

入海也磁の釜に筆千も

筆にほくくぬく鴨乃豆

く川鴨も大遠くくはくく水

白空

葛原

お草

園指

芭蕉

乍木

秋はよころひのふと海風くま

くくくや海月よまろちあめ

くく透や子持ひあめく水

一塔よまの白魚や考のふ

かくぬやも脈をわくく降

杜夫魚を何脈の大ききそ水よは

都の川よのくあろくを

三人 刺雪

車麿

代水

杉風

拙作

冬月 附余

和歌集

管のせり賣ありくきの月

里圃

あゝ猫のわけもは軒やきの月

大寺

何より藤のうきやうり強ゆる

中春

ふれやけきぬるきの月

支考

埋火

埋火物習ふきは客の歌あり

芭蕉

佛のさるあまを思ふ火燈

桃先

自由の月を思ふかきまの燈

同木

雪

ゆき物にけぢあり夕の光

真角

新雪の月を思ふ酒の味

全

雪あはれ心のこころをこけ

夕東

鳥驚くゆきを思ふ雪

祐甫

雪垣の雪を思ふ雪

葛平

ゆきつゆの雪を思ふ雪

支考

片雪の雪を思ふ雪

圃吟

思ふ所のまゝに目枝のおれ

文孝

髪を利き降よるちりちりけ

陽和

伊加え大和くちやる山や雪のた

配力

神樂

おゆふに薫と茶もあはれ

史邦

侍さくし

倉付やうりくたり子の侍お

路平

侍あつた干鮭賣をすまわり

馬寛

娘入のしりもさりと侍さくし

許六

痕を送りくたり侍さくし

匠圃

煤掃附辭

煤掃やあつた嵐込めさる鴉の甲

孫香

煤掃やあつたあつたあつたあつた

黄逸
深瀧

やうたな隣のかつたあつたあつた

馬寛

雑記下

嫁とてやわすれてゆく神さま

筒如こ

煤掃也折な一故臨く

唯然

餅つふや火をかきてお男を

仙水

餅はくやあくるのころ鶴の

嵐堂

ゆら搗の手傳ひよるや山伏

馬佛

歳暮附正月の衣配

とみくは送も酒きの市のこは

角三

所砂やあきてきまの洗ひ髪

里東

賣るやとてもやうな年の暮

草土

猿もおよのちりまをたやの暮

車来

大やや款子きとては持るひ

万手

袴もぬ舞へもありとの暮

孝因

年の市位を呼んお穢との

其角

おこちん小豆も市の賑をひ

正秀

引張か一はみ足やの暮

花子

桶の輪のまよあはしとの暮

猿雖

小豆 正秀

天鵝毛のたぬきあての巻

唯然

後狹又筆を引かしてや

の巻

けろと圖司呂丸の巻の巻の巻

の巻

いとの巻の巻の巻の巻

の巻

盗人のあてのあてのあて

芭蕉

余所よたづてたのあてのあて

支考

漱にたづねてたのあてのあて

土考

言をよゆ弱りて海を霧の中

高白

言をよゆの抱子を好むすの巻

桃後

裁屑を束の子らに川をぬ

山崎

一志をよゆて釋り陰の巻

利合

雑文

巾着風に糸を挽くろをよ

軒嶺

括りよめ風を巻くろの端

土考

井のあてのあてのあて

土考

續

四

仙杖	雪堂	二谷	法圃	杉風
仙杖	雪堂	二谷	法圃	杉風
仙杖	雪堂	二谷	法圃	杉風
仙杖	雪堂	二谷	法圃	杉風
仙杖	雪堂	二谷	法圃	杉風

釈教之部 附 追善 哀儀

涅槃

法圃	區蕉	不撤	山鐘
法圃	區蕉	不撤	山鐘
法圃	區蕉	不撤	山鐘
法圃	區蕉	不撤	山鐘
法圃	區蕉	不撤	山鐘

権佛

権佐やほろーあゝあろ井戸

曲

家花や仰らされて二と月

不玉

権仰や親迦と程婆を徒才と

之道

意冬

冷物とよな水とほー一課あり

嵐

藤乃々のあこしやとそ課の

去来

やは休や坊とひるもあふ

法圃

甲戌の夏大陣の情をさこの

かしの...
き四里の...
さあ...
さあ...

さあ...
さあ...

芭蕉

悼少年 二句

うら...
うら...

惟然

その親を...
その親を...

支考

うは...
うは...

...

青の...
青の...

木花

しんじゆ 糞毒やと皮桶の水 支那

佐藤

柚も柿もおろしれり 佐藤 法圃

臘八

鶉よとくろりてんれを袖豆汁 許六

何のあれかのあどりめを大呼侍 知行

雑言

洛東の真如堂に

善光寺如來開帳の時

涼しき時ふらふらほふり 去来

あまのやまの二たき けいめい 智月

いしつやまのまのまの在也 乙州

まのまの川越向ふや富ま 多賀

よまきと朝のうら 野坡

食堂に雀啼たり夕射ぬ 支考

Faint bleed-through text from the reverse side of the page, including words like "The end" and "I have" in English.

旅く部

送別

え禄七手のまをさるゑの
あをん送りて

まぬくに群るのう世のふくね
つろや柿喰ひありつたのと
荷分
惟然

許六

本居海におまゝく付

旅人のちるはもの似よ推のた
芭蕉

留別

倍の惟然ら空あり

古帰めゆら付

嵐やうもやまの草ひまかしくり

丈夫

鮎の子れま〜魚送るふの外

芭蕉

甲斐のこの婦よ泣る付

〜形めらせにからん

年ありて牛に乗りぬも草花物

木暮

船つは舟ほ世をたぐる旅の者

越人

あ〜も〜つゝある〜川船や旅の者

野狂

ちの國のおもしろ付

〜の〜の〜の〜の〜の〜

ろれ〜ま谷^ヤ地やりけし中ね

と物

十圓子の小は船よちりぬ秋の風

許六

大名のち藤台にも船をるおる外

全

〜は船の海

〜る〜はち〜の〜の〜の〜の〜の〜

魚目

〜の〜の〜の〜の〜の〜の〜の〜

猿雛

〜の〜の〜の〜の〜の〜の〜の〜

我峯

おのろしほをきてゆはあり 弟の馬

史邦

田園の心さし せし病し けはりの

こもくさつし

父老の庵ちこけき 秋涼

立人
呂丸

我 備 園 つくぬ 旅の 庵と 花

佐圃

常産の園が ありひとらふ 所よ

おまろておとり せんとも 一と

そのおまろは ありあまの ちか

くまろとれと 一お別れの 軒の

下にありあま

あて

椽のわたりは 情も 梅に 虫と 粥

支考

を川にや 道よとらふ 花もと

全

え 禄と 虫の あり 葉はの あり

あり 武ら あり あり あり あり

の 驛 あり あり あり あり

あり

宥かりて 名を あり

あり あり

續猿蓑を芭蕉翁乃一派りすん
 何人の機をいふをきくに近世の
 懐伊笑と整るる見松尾ふり
 此神子あり其二巻らむ字を録て
 漸むいふ本のむかふをあらん
 せふ廣むらうをゆるい書中
 或いふ書けいおのいふ入ふおの
 くはらはる中箱のすまふなり

猿蓑の機をいふをきくに近世の
 懐伊笑と整るる見松尾ふり
 此神子あり其二巻らむ字を録て
 漸むいふ本のむかふをあらん
 せふ廣むらうをゆるい書中
 或いふ書けいおのいふ入ふおの
 くはらはる中箱のすまふなり

一、
月書、
と

か
は

は

は

は

か
は
は



